

鼓童 × チェ・ジエチヨル

特別共演作品

「山踏み」のみどころ



左:住吉佑太さん 右:チェ・ジエチヨルさん

今作の演出は2022年に上演した『ミチカケ』で音楽監督を務めていた住吉佑太さん。ゲストの韓国太鼓(チャンゴ)演奏家チェ・ジエチヨル(崔在哲)さんが提唱する「歩みの中から生まれてくるリズム」をテーマにしたことから※「タイコウォーク」を行っているのだとか。

住吉さんにどのような作品になりそうなのか、「歩く」ということはどういうことなのか伺いました。

常に僕の中で興味のあるものが二方向あるんです。一つは前作の『ミチカケ』のような前衛音楽、と同時に土着的なものにも魅力を感じています。そういう意味で『山踏み』は前作と真逆になるかと思っています。とはいえ特定の郷土の音楽を取り上げるのではなく、誰もが本能的に惹かれるリズムやグルーブ感を

表現したいですね。共演するチェさんは、そもそも「チャンゴとは何か」を追求するために歩き始めたと聞いています。そのチェさんが提唱する「歩みの中から生まれてくるリズム」を鼓童として探求しようと一緒に歩いているわけですが、歩くときいろいろな発見があるんです。

「歩いて分かること」が面白い前からサムルノリや韓国の音楽が面白いなと思って憧れがあったんです。でも音楽だけを聴いてもなんて叩いてるか全く分からない。西洋音楽的な発想では、正しくは理解できないという感じがですね。ですがチェさんと共に太鼓を叩きながら歩くとき何を叩いているか分かるようになったんです。

しかも一緒に歩くと共通のグルーブが生まれてくる。それはスイングでもないしストリートでもない。その境目が無くなってくるのもすごく面白い経験でした。

国を超えた、人類が共通のリズムとして、この夏にセネガルの太鼓に傾倒しているイスラエルのドラママーと作品を作ったので、「タイコウォーク」でセネガルのリズムをいくつか叩いてみたのですが、リズム感がチャンゴと同じなんです。それは大きな発見であり「地球の音楽って、みんなこうだよね！」と感じました。その面白さを皆さんにお伝えしたいです。文化圏

が違っても同じ地球、重力の上で音楽をやっていると同じ感覚になる。それが国を超えらるというか、人類が共通で持つリズム感なんだなと思いました。

今回は「屋台囃子」や「三宅」など鼓童の既存曲もやりますが、ほとんどが新曲です。基本的に僕が作曲していますが、机で考えた曲は極力無くし、歩みから生まれた曲にしたいと思っています。

そしてきつちりと作り込まず、みんな「歩く」という、作品の下地を一生懸命に作ってみようと考えています。ある意味、粗雑な、粗暴な構造にしておいて、そこにこれまで歩いてきた経験や実感が隙間から見える作品になったらと思っています。

「山踏み」の見どころ

ツアーでゲストを呼ぶのは鼓童としては初の試みなので、そこもぜひ注目してもらいたいです。それから今作は、みんな「韓国の音楽」をやってみようというものではないんです。音楽や、リズムの起こりみたいな深いところを追求しています。ですがパワフルで本能的な舞台になること間違いなしなので、皆様、ぜひお見逃しなく！

ゲスト出演のチェさんより

今回、鼓童のメンバーたちは実際に佐渡島を歩いて道端で太鼓を叩き、いろんな景色を見たり、風の音を聞いたり、足で地面を踏んだりして佐渡をものすごく感じとったと思います。それが舞台の中で結晶となってどう表れてくるのか。どうぞご期待ください！

チェさんのウエブサイト



※「タイコウォーク」とは

今年一月から『山踏み』初演となる十一月まで、今作の作品作りのため、出演者が佐渡島一周(約280キロ)を楽器の演奏しながら歩くプロジェクト。海風を感じ、自然の匂いを嗅ぎ、足の裏や筋肉など五感を使い「歩みの中から生まれてくるリズム」を探求する。

インタビュのフルバージョンは「こちら



# 「山踏み」出演メンバーに聞きました。

今回の作品を作る中で、楽器を演奏しながら佐渡を歩く「タイコウオーク」など、新たな試みも進められていますが、その中でへ発見したことへ感じたことへは何ですか？



東京都町田市出身  
中込健太

三年前チエさんと、初めて歩いて友達になって、佐渡の滝で遊んだり、去年は、海の中で、楽器を演奏したり、海藻を食べてみたり。そんなことを一緒に楽しめる人に初めて出会えて俺は幸せです。劇場を飛び越えて、野良で、広い世界を感じたい。



福島県いわき市出身  
小松崎正吾

十年前にチエさんと出逢つてからの自分のライフワークと鼓童での生き方を繋いでくれる節目の作品。色々な境を飛び越えて、一つの命として精一杯生き切ります！



香川県三豊市出身  
住吉佑太

音楽的要素や理論ではなく、身体運動からリズムを見つめ直す。根源的なリズムの起こりを知れるような気がして、興奮しています(笑)



千葉県八千代市出身  
地代 純

思考を手放し、感覚に身を委ねる。その時どうしたくなるかの声を聴く。その声を感じる感性と肉体を育み続ける。



愛知県東海市出身  
鶴見龍馬

歩くとき普段より周りの情報が入ってくる。キツイ時、仲間の存在とみんなが打つリズムがもう一歩先へと歩を進めてくれる。そんな感覚を舞台にも活かしたい。



神奈川県横浜市出身  
北林玲央

歩くという自分からおこす動作から地面や自然から力をもらい歩かされているような感覚になる時が最高です。そこから出てくる体験したことのないリズムに出逢いたい。



埼玉県川越市出身  
木村佑太

一月にチエさんとレコーディングをさせて頂いた時に、音が身体から出てると感じました。チエさんの様に感情を音に変換する感覚を掴んでみたいですね！



鹿児島県姶良市出身  
平田裕貴

ノリとかグルーヴとか見直そうと思ったのですが、しばらく歩くうちにどうでも良く考える余裕がなくなりました。もっと素直に音を鳴らそうと思います。



福岡県糟屋郡出身  
定成啓

同じフレーズを叩いているのに、その時の環境の違いによって、全然違うフレーズを叩いているような感覚がありました。そもそも太鼓を叩かなくてもこんなに歩いたのは初めてだったのでめちゃくちゃ楽しかったです。



神奈川県横浜市出身  
中谷 瞳

僕は今まで、「歩く」という動作からリズムを派生したことがなかった。リズムを叩くときは大体頭で考えてしまう。タイコウオークやってみて、平坦な道や坂道、下り坂に身を任せて叩く。最初は癖でリズムを考えると本能的にリズムが入るようになってきた。その気持ち良い感覚を皆さんにも体感してもらいたいです。



埼玉県鶴ヶ島市出身  
新山 萌

佐渡の普段あまり行かないところにも行って感じたのですが、佐渡の人は太鼓の音が聞こえてくると家の中からひよこつと顔を出してくれます。そして「がんばれー！」と温かい言葉をかけてくれました。嫌な顔をする人は滅多にいません。それが一番驚きだったと同時に、佐渡でやることの意味と、そもそも鼓童が佐渡にある意味を改めて感じるきっかけになりました。



埼玉県入間市出身  
野仲純平

ずっと歩きながら演奏していると、三拍子で叩いているのか四拍子で叩いているのかわからなくなってくるこの曖昧なグルーヴが、歩みから生まれてきたのだと実感できた。



## 鼓童十二月特別公演2024「山踏み」 京都芸術劇場 春秋座

2024年12月14日(土)・15日(日) 両日共に13時開演

今冬お届けする鼓童の最新作は、韓国太鼓(チャンゴ)演奏家のチェ・ジェ Chol(崔在哲)氏をゲストに迎えた特別共演作品。チェ氏の提唱する「歩みの中から生まれてくるリズム」とともに探求し、作り上げるプロジェクト型作品です。「身体性、音楽性、精神性」この三本の柱を足元から見つめ、新しくも奥深い、そして鼓童らしさを兼ね備えた舞台を、京都・春秋座でぜひ生で体感してください!

